

「謙遜の勧め」

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①1~8章が教理
- ②9~11章がイスラエルの救い
- ③12~16章が適用

(2) ロマ 12:1~2 (それ以降の行動を導く基本原則)

- ①神の恵みの理解 (1~11章) が土台
- ②自発的ささげ物をささげる。
 - * 一度限りの決断
- ③「この時代」と戦い、精神を一新することによって、日々神に変えていただく。
 - * 日々の決断
- ④アンケートの紹介

(3) きょうの箇所

- ①教会内での行動 (12:3~21)
- ②謙遜の勧め (3~8節)
- ③愛の勧め (9~21節)

2. アウトライン

- (1) 警告 (3節)
- (2) みからだの教理 (4~5節)
- (3) 御霊の賜物の行使 (6~8節)

3. メッセージのゴール

- (1) 自分の立場
- (2) 自分の能力
- (3) 自分の人生のゴール

このメッセージは、謙遜について学ぼうとするものである。

I. 警告 (3節)

1. プライドの問題

(1) 献身の生涯を妨げる最大の要因は、プライドである。

①御霊の賜物は、教会内で行使されるもの。

②御霊の賜物の行使について語る前に、謙遜について語る必要がある。

③ここでのテーマは、霊的プライドである。

(2) この箇所は、御霊の賜物の解説というよりは、その行使の方法の解説である。

2. 3節 a

「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います」(新改訳)

「わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います」(新共同訳)

「わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う」(口語訳)

(1) 指導者だけでなく、すべての信徒に対する警告である。

(2) パウロの立場

①「恵み」とは、ギリシア語で「カリス」。

②「御霊の賜物」とは、ギリシア語で「カリスマ」、「カリスマタ」(複数形)。

③パウロは、「カリス」に基づいて、「カリスマタ」を論じている。

④自分に適用していない真理を論じているのではない。

(3) ロマ 1:5

「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです」

①使徒の務めもまた、恵みである。

②「私たち」とあるのは、パウロだけではないということ。

③ローマ教会は、他の人によって設立された。

(4) ロマ 15:15~16

「ただ私が所々、かなり大胆に書いたのは、あなたがたにもう一度思い起こしてもらうためでした。それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです」

2. 3節b

「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい」(新改訳)

「自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです」(新共同訳)

「思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである」(口語訳)

(1) 似たような言葉の繰り返しによって、謙遜の重要性を強調している。

- ①「思うべき限度」は、「フロネオウ」。
- ②「思い上がる」は、「ヒュペアフロネオウ」。
- ③「慎み深く」は、「ソウフロネオウ」。
- ④「思うべきである」は、「フロネオウ」。

(2) 意味の比較

- ①基本形は、「フロネオウ」である(2回出ている)。
- ②自分を過大評価するのは、「ヒュペア+フロネオウ」である。
- ③正気で自分を見るのは、「ソウフロネオウ」である。

(3) 「ヒュペロオン」という名詞

「彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった」(使1:13)

- ①「屋上の間」(使1:13)
- ②「the upper room」
- ③自分を過大評価するとは、上から視線で人を見ることである。

(4) 3節bの「慎み深く」は、「ソウフロネオウ」。

- ①正気になって考えなさい、という言葉である。
- ②これは、酔った状態、中毒状態を暗示している。
- ③私にとって、私が一番大事である。
- ④この状態は、「エゴホリック」である。
- ⑤パウロは、正気になれと勧告している。

3. 信仰もまた、賜物である。

(1) 各人に、信仰の限度容量が与えられている。

- ①信仰の強さを誇ることは、赦されない。
- ②与えられた信仰の限度容量に従って考える。

(2) ピリ 2:3

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」

II. みからだの教理 (4~5 節)

1. 人間の体と「みからだ」(教会)の対比

- (1) 一体性 (同じからだに属する)
- (2) 多様性 (異なった働きがある)
- (3) 調和 (愛による賜物の行使)

2. 4~5 節

「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです」

- (1) 「キリストにあって」がキーワードである。
 - ①教会内の問題の多くは、新生していない「信者」が原因となっている。
 - ②「キリストにあって」、私たちは、おなじからだの一部となる。
 - ③キリスト教は、共同体として信仰体験する宗教である。
- (2) プライドが入り込む余地はない。
 - ①御霊の賜物は、すべて恵みによって与えられたものである。
 - ②ひとりの人が、御霊の賜物をすべて所有していることはない。
 - ③ひとつの地域教会が、御霊の賜物をすべて所有していることもない。
 - ④私たちは、お互いを必要としている。
 - ⑤「一匹狼」クリスチャンは、存在しない。

III. 御霊の賜物の行使 (6~8 節)

1. 御霊の賜物

(1) 御霊の賜物それ自体の解説ではなく、それらを謙遜に行使せよとの勧め。

(2) 御霊の賜物は、合計19上げられている。

① I ペテ 4 : 10

② ロマ 12 : 4 ~ 8

③ エペ 4 : 11

④ I コリ 7 : 1, 7

⑤ I コリ 12 : 14 ~ 16

(3) ここでは、7つの御霊の賜物が上げられている。

① パウロは、2年ほど前にコリント人への手紙第一を書いている。

② I コリ 12 ~ 14 章で、御霊の賜物の行使について、教えている。

* 御霊の賜物には、重要性の差があるが、それでもプライドは赦されない。

③ ロマ書に詳細なリストがない理由は、この教会が霊的に成熟していたからか。

2. 7つの御霊の賜物

(1) 預言すること

* 神から直接の啓示を受ける人

* アンテオケ教会 (使 13 : 1)

* アガボ (使 11 : 27 ~ 28, 21 : 10 ~ 11)

* ピリポの娘たち (使 21 : 8 ~ 9)

* 預言者が語ったことは、必ず成就せねばならない。

* 新約の完結とともに、この賜物は終わった。

(2) 奉仕すること

* ギリシア語で「ディアコニア」。

* 奉仕は聖霊の賜物のひとつである。

* 執事は、奉仕の賜物のある人が就く役職である。

* 全的献身が勧められている。

(3) 教えること

* 真理をまとめ、聞く人に分かるように語る能力である。

* 霊的真理を伝達する能力である。

(4) 勧めをすること

*真理を實際生活に適用するように人々を励ますことである。

*教える賜物があっても、この賜物がない場合がある。

*その逆もある。

(5) 分け与えること

*すべての信者は、愛の実践として分け与えることを実行する。

*この賜物を持った人は、より多くのものを分け与える。

*収入の90パーセントを捧げるような人には、この賜物がある。

(6) 指導すること(管理すること)

*長老職に就く人は、この賜物を持っていないといけない。

*サーバントリーダーシップ(神の権威の下にいる。マタ8:9参照)

(7) 慈善を行うこと

*病人、貧しい人に助けの手を伸ばすことである。

*この賜物のある人は、喜んでそれを行うべきである。

結論

1. 自分の立場

(1) ユダヤ人信者と異邦人信者の対立

(2) しかし、生きた供え物には、「立場」や「地位」はない。

(3) メシアニック・ジューを敬愛するが、卑屈になる必要はない。

2. 自分の能力

(1) 信仰さえも、神からの賜物である。

(2) 御霊の賜物には、重要性の順番がある。

(3) しかし、恵みによって与えられているので、誇ることはできない。

3. 自分の人生のゴール

(1) キリスト教は、自己実現の宗教ではない。

(2) 私たちは、神の栄光のために生きている。

(3) 御霊の賜物は、からだ全体を建て上げるためのものである。

(4) これこそ、真の自己実現である。

(例話)「鳥の鳴き声」

鳥の中で鳴き声を出すのは、小さな鳥だけ。

鷲や鷹、七面鳥やダチョウは、さえずらない。

小鳥たちはさえずる。カナリヤ、ミソサザイ、ヒバリなどは、美しい声で歌う。

人間の世界でも、最も美しい歌声は、主の前に謙遜で、自分を「小さな者」と考えているクリスチャンたちから出てくる。